2019 年度　事業報告書

はじめに

1) 外国語電話相談 1

2) HIV 陽性者等のための多言語での個別支援 2

3) グループプログラム 5

4) 多言語支援 8

5) 調査研究 11

6) 研修及び受け入れ 13

7) 広報 15

8) 理事会 16

9) 会員総会 17

10) 事務局 18

11) 会員 18

12) 寄付者一覧（敬称略） 18

決算報告

特定非営利活動法人 **CHARM**

(Center for Health And Rights of Migrants)

はじめに

この巻頭文を書いているのは、新型コロナウィルスに対して政府が緊急事態宣言を出そうしている2020 年 4 月 6 日です。最初は中国の武漢を中心に感染が確認されたウイルスは、数か月後にはアマゾンの先住民でも感染者が確認されるなど、いとも簡単に世界的なパンデミックとなり、多くの尊い命を奪っています。交通機能の発達によって多くの人が簡単に国境を越えられるようになった現代では、当然の結果なのかもしれません。志村けん、イギリスのジョンソン首相が感染したように、これも当たり前のことですが、ウイルスは人を選びません。誰でも感染するリスクがあるにも関わらず、残念ながら検査や医療へのアクセスは世界中で平等にあるとは言えません。途上国、貧困者、外国人、セックスワーカーといった周縁化された人たちは、後回しになっている現実があります。いまこそ世界中の人たちが国境、セクシュアリティ、経済的格差などを超えて協力し合い、このパンデミックを乗り越えていくしかないと思います。これはまさに CHARM が実践してきたことであり、目指すところでもあります。

副理事長　武田丈

●2019 年度 CHARM 事業報告書

1) 外国語電話相談

外国語によるエイズ電話相談

日本語以外の言葉を話す人たちが HIV について相談をしたり、英語などで検査や診療が受けられる医療機関の情報を得たりする場として多言語電話相談を毎週実施している。この事業は、大阪府、大阪市からの委託として CHARM が行っており今年で 18 年目を迎える。

言語については、2002 年からポルトガル語、スペイン語、タイ語、フィリピン語、英語の 5 言語の相談を提供してきた。2018 年度は 196 件の相談を受けた。

言語別相談数は、ポルトガル語が 47 件(昨年度より+5 件)、スペイン語が 8 件(-2)、英語が 88 件(+8)、タイ語が 18 件(＋5)、フィリピン語が 1 件(-10)だった。これ以外に日本語による相談が 19 件(＋16)、そして医療機関からの問い合わせが 15 件(＋4)あった。

相談内容としては、外国語の通じる抗体検査会場紹介、行政手続の方法、HIV に関する情報に関する内容が多く、それぞれ 48 件に上る。また PWHA そのほかが 45 件あった。

2018 年度に続き、2019 年度においても、外国語が通じる抗体検査会場の情報を求める相談者が増加し、そして、PWHA そのほかの相談も増加し、幅広い対応が求められていることがわかる。

なお、近年の在留人口の変化や支援のニードを考慮した結果、対応言語の一つであるタイ語を 2019 年度末で終了し、代わりに中国語での相談対応を 2020 年 4 月から開始することとなった。中国語の相談員を 2 名体制で対応していく予定である。

2019 年度 対応言語

月 言語	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年間合計
日本語	1	1	4	2	2	6	0	1	2	0	0	0	19
英語	5	3	17	17	4	12	4	4	5	5	7	5	88
スペイン語	0	0	0	1	0	4	0	0	2	0	0	1	8
タイ	1	2	1	2	1	2	1	0	1	2	3	2	18
ポルトガル語	3	1	1	5	4	1	3	4	9	10	4	2	47
フィリピン語	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
医療機関	1	4	2	0	2	0	1	1	0	1	0	3	15
合計	11	12	25	27	13	25	9	10	19	18	14	13	196

2019 年度 相談内容(複数回答あり)

月 内容	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
外国語の通じる抗体検査会場紹介	2	2	10	9	1	12	2	2	0	4	3	1	**48**
外国語の通じる医療機関の紹介	1	0	3	4	0	1	2	1	4	0	1	2	19
行政手続の方法	1	5	3	5	6	7	3	4	6	3	3	2	**48**
性感染症、婦人科系の問題	2	1	2	3	2	1	0	2	2	1	0	0	16
HIV に関する情報	3	1	8	6	2	4	6	5	8	4	0	1	**48**
PWHA 症状、薬の副作用	0	0	0	2	1	0	0	0	3	2	3	2	13
PWHA 社会福祉制度、医療費、薬価	2	1	1	3	0	0	4	1	5	4	4	1	26

PWHA 不安、心理的問題	1	3	1	3	1	1	4	0	4	3	2	4	27
海外の HIV 診療事情、受入れ機関紹介	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2
PWHA その他	3	5	2	2	6	4	3	2	2	3	8	5	**45**
医療機関紹介	2	1	1	4	1	3	2	3	8	6	1	2	34
NGO/NPO 紹介	3	1	2	5	0	0	0	3	6	3	1	0	24
HIV を含む性感染症への不安	0	0	6	3	0	1	1	1	3	1	1	0	17
その他	2	0	3	3	0	0	0	1	3	1	0	1	14
合計	22	21	42	52	20	34	27	25	55	35	27	21	381

(大阪府・大阪市委託：外国人エイズ電話相談事業)

2) HIV 陽性者等のための多言語での個別支援

CHARM は設立当初から個々の人が必要としている支援を提供してきた。20 年近く経過して人々の背景がさらに多様化した現在も個別支援の中から共通項を見出してシステム化する取り組みは変わっていない。

個別支援の中には、対面相談、介護保険でカバーされない手助け「そよかぜ」(旧すけだち)、HIV 医療などの情報提供、そしてエイズ専門相談が含まれる。

2-1) 多言語対面相談

CHARM では、相談室での対面相談を実施している。個人情報が守られる環境でカウンセラーやソーシャルワーカーが相談を受ける。問題を解決するために次の方法を検討するか、自分の気持ちを表現することで自らが整理をする機会とするかは相談者が決める。以前は、外国人は在留資格など具体的に解決しなければならない問題が明確であったため問題解決型であったが、近年は長期に日本に在留し、自分の国に戻るという選択肢がない外国人は、日本人が持つのと同じような出口のない問題を抱えて自分の気持ちを整理する場として使うことも増えてきた。2019 年度は、30 件の対面相談を行なった。

2-2) 介護保険でカバーされない手助け「そよかぜ」(旧すけだち)

HIV 陽性者は、薬が改善されたことにより HIV のコントロールについては、できている人が多いが、加齢と共にこれまでできた単独行動の範囲が狭まり、日常生活に不自由が生じてきている。そよかぜでは、介護保険ではカバーされない支援を行うことを目的としている。

日本の医療と福祉は家族がいることを前提としている。病院への同行、病院の中で車椅子を押す、背中に湿布を貼る、入院中に洗濯物を取りに行く、葬式の段取りをする、などは家族がすることが当たり前とされているが、単身者や外国人など身近に家族がいない人は誰も手伝ってくれる人がいない。従来家族がしている役割を家族以外の人が担い、それを組織として担うことができれば個人に責任や負担をかけることなくみんなが助かる。そのためにはシステム化が必要となり 2019 年度は、システム化を行ない、以下の書類を作成した。

・サービス案内パンフレット
・サービス利用規約、同意書
・現金預かり証/残金返却証

2019 年度の活動は、年間 21 件でスタッフ会議は毎月定例で 12 回行った。8 月には大阪市内の拠点病院からの依頼で退院予定の患者が介護保険を利用できるようになるまでの間の短期集中支援の依頼を受けてほぼ毎週支援に入り、拠点病院や訪問看護ステーションと共同して患者を支援した。介護保険の制度に移行してサービスは終了した。2020 年になってからは新型コロナウィルスの影響で訪問を控え

ることになり利用者とも出会えなくなった。免疫が低い人は、人と接しない方が良いとされる時期が長引く中で必要とされる支援をどのように提供するかについて多様な方法を検討していく必要性を実感した。

(厚生労働省 HIV 陽性者等の HIV に関する相談・支援事業)

2-3) HIV 医療などの情報提供

昨年に続き、これから日本で働くために来日する予定の外国人からホームページを通して多くアクセスがあった。その大半は、HIV 陽性者であり、問い合わせ内容は、日本でどのように HIV 治療を継続できるか、診療してもらえる病院はあるか、薬はどのように手に入るか、などの内容であった。慢性疾患を持つ人が国境を越えて働き、移住している。CHARM では治療体制のシステム、社会保障の説明、支援団体の連絡先などの情報を提供した。また言葉の支援が必要な人には、通訳派遣の調整や機関の紹介を行なった。

インターネットによる相談の内容と対応

	使用言語	対応した内容(複数可)	CHARM を知った経緯
1	英語	日本の HIV 治療について	インターネット
2	英語	日本の HIV 治療について	インターネット
3	英語	多言語支援	大学から知った
4	ポルトガル語	日本の HIV 治療について	インターネット
5	医療機関	多言語支援	病院から
6	日本語翻訳 (元の言語不明)	在留資格	インターネット
7	日本語翻訳 (元の言語不明)	行政機関の個人情報の扱いへの不安	インターネット
8	英語	多言語支援	インターネット
9	英語	多言語支援	インターネット
10	英語	多言語支援	インターネット
11	英語	多言語支援	HIV 検査会場 (媒体不明)
12	保健所	資料等のお問い合わせ	情報誌
13	中国語	多言語支援	HIV 検査会場 (媒体不明)
14	日本語	日本の HIV 治療について	インターネット
15	英語	日本の HIV 治療について	インターネット
16	英語	多言語支援	インターネット
17	日本語	外国での HIV 検査について	病院
18	英語	日本の HIV 治療について	インターネット
19	日本語	日本の HIV 治療について	インターネット
20	英語	日本の HIV 治療について	インターネット
21	英語	日本の HIV 治療について	インターネット
22	英語	多言語支援	インターネット
23	ポルトガル語	多言語支援	インターネット

24	ポルトガル語	日本の HIV 治療について	インターネット
25	英語	日本の HIV 治療について	インターネット
26	英語	多言語支援	大学
27	ポルトガル語	日本の HIV 治療について	インターネット
28	英語	日本の HIV 治療について	インターネット
29	スペイン語	多言語支援	HIV 検査会場
30	フィリピン語	日本の HIV 治療について	インターネット
31	英語	日本の HIV 治療について	インターネット
32	フィリピン語	日本の HIV 治療について	インターネット
33	保健所	多言語支援	保健所
34	ポルトガル語	日本の HIV 治療について	インターネット
35	日本語	日本の HIV 治療について	インターネット
36	ポルトガル語	日本の HIV 治療について	インターネット
37	日本語	医療機関から　ベトナムの HIV 治療薬	メール
38	日本語	インドネシアの HIV 治療事情	メール

2-4) エイズ専門相談支援事業

CHARM のカウンセラーチームは、6 名が対応しているが、今年度は 1 名増員して 7 名体制となり、対応能力を高めることができた。エイズカウンセラーは、医療や福祉制度の知識が求められる上、本人の個人情報の取り扱いに関する守秘義務、セクシュアリティや依存症に関する経験など多様な事柄を要求する一方で、その位置付けは派遣業務であるため経済的に不安定でありなかなか若手の人材が参加しにくい状況にある。HIV のカウンセリングは、悩みや不安への対応だけではなく現実的な問題解決に向けた相談を受ける場合もあるため、様々な背景を持つ人材で構成している。臨床心理、ソーシャルワーク、看護、などの専門を持つ人で HIV カウンセリングに関心がある方は歓迎なので是非紹介していただきたい。

2019 年度のエイズ専門相談支援事業によるカウンセラーの派遣は、前年度比で 22 件増加し、延べ 96 件となった。増加分の約半数は、陽性告知の増加であり昨年比 13 件の増加であった。大阪市内 3 保健福祉センターで行っている HIV 検査等の検査の陽性告知は、集中する時期があり毎年春、夏、そして 12 月頃となる。今年度もその傾向は見られた。大阪市が市民団体 MASH 大阪と共同で行っている dista でちぇっくんは、ゲイコミュニティーで行う検査事業であり検査を必要としている人が検査を受ける機会を提供できている。病院でのカウンセリングも延べ 10 件増加した。今後も HIV 陽性者が安心して告知を受け、治療を続けられるように支援していきたい。

エイズ専門相談員派遣先・回数（2019 年度）

	定例相談		病院	告知				
	中央	北		中央	北	淀川	dista	合計
4 月	2	2	1	1	2			8
5 月	1	1	1	2				5
6 月	2	2	1	1			1	7
7 月	2	2	1				1	6

8 月	1	2	1		1			5
9 月	2	2	1	1	1	1	2	10
10 月	2	2	2	2		1		9
11 月	2	2	3	1		3		11
12 月	2	2	4					8
1 月	1	1	2				1	5
2 月	2	2	4	3				11
3 月	2	2	4	1	1	1		11
合計	21	22	25	12	5	6	5	96

(大阪市委託：エイズ専門相談)

3) グループプログラム

3-1) HIV 陽性と分かって間もない人のためのグループミーティング「ひよっこクラブ」

ひよっこクラブは、HIV 陽性とわかって原則 1 年以内の人を対象とした少人数制（定員 6 名）のグループミーティングである。このプログラムは、2009 年の開始から今年度で 11 年目になる。病気とともに歩むこれからの人生を、HIV 陽性とわかって間もない人同士が集い、仲間となって話し合う。その話し合いには、ピアスタッフ、医療スタッフ、対人援助スタッフがボランティアで参加し、補助する。先輩の経験を聴き、正しい医療情報を得て、十分に話し合うことで、新しい生活を安心して送ることができるように開催している。

現在まで、40 期が実施され、計 105 人（のべ 254 人）の HIV 陽性者が参加した。参加者からは「ネット情報が多くあるが正しいかどうかがわからなかった。ここで医療スタッフから直接聞いてよく理解できた」「病気のことを初めて他人に話すことができた」などの感想が得られた。また、本プログラムを終了した参加者のほとんどが、次に何かの機会があればまた参加したいと希望している。

匿名で参加でき、どこまで開示するかをスタッフが留意しながら個人情報を守り、参加者同士が安心して話し、経験や想いを共有し孤独感を軽減できる。ひよっこクラブは「次への一歩」もしくは「通過点」であり、参加後に必要がある場合は様々なサービスの案内を行っている。また、薬や担当医師、看護師とのつきあい方も大切である。

半日間のプログラムは、3 部から構成され、①参加者同士の関係づくり ②医療情報の提供と質疑応答 ③今後の生活についての話し合い 等からなる。近年、 HIV 陽性者は病気と付き合いながら普通に日常生活を送ることができるようになり、したがって仕事をしている人が多い。なかなか休みが取りにくい現実の中、2015 年度までは同内容を 3 日に分け 3 回コース、2016 年度からは半日コースとして参加者の現状に合わせて開催方法を変化させてきた。最近は事前オリエンテーションも希望に合わせ、開催当日の午前に実施することも可能としている。また、多忙や体力の問題で大阪まで来られない希望者のために、地方での開催を新たに試みた。今年は愛媛県での開催を試みたが、準備時間が足りず、企画はしたが希望者を得ることができなかった。地方開催は来年度も試みるべく準備を継続している。

開催は年 5 回となっており、申し込みは随時行っている。ほぼ 2 ヶ月に一度のペースになるため、申し込みをしていた回に都合が悪くなっても、次回参加に切り替えるなどの対応が可能となっている。多くの参加者が受診病院の紹介及び母体となる CHARM のホームページから開催情報を得て、メールで問い合わせてくる。

各期後に全スタッフを対象としてスタッフ振り返りミーティングを実施している。運営・プログラム実施スタッフ計 10 人、コーディネーター1 人、オリエンテーション担当ボランティア 2 人、全 13 人の人員体制であり、内、ほぼスタッフの半数は、HIV 陽性者で構成されているのが、ひよっこクラブ運営の大きな特徴である。

参加者数減少による広報宣伝の工夫は、まず CHARM 全体の HP にひよっこクラブ HP が統合され、更新がしやすくなったが、目的のページを見つけられないとの指摘もあり、改訂を続けている。また、従来の四つ折りパンフレット

を全て使い切り、ポスターとともに医療機関、自治体、保健所、NPO 団体に郵送した。郵送回数は年 3 回から 1 回に抑え、臨時に 2 月開催案内を京阪神の医療機関に郵送した。予算を抑制しつつ、的確にほしい情報をほしい人へ伝える方法は今後も検討課題である。

◆2019 年度実施内容

開催月	5 月	7 月	9 月	11 月	2 月
開催期数	36 期	37 期	38 期	39 期	40 期
オリエンテーション	1	3	0	0	4
参加者	0	4	0	0	3
スタッフ(対人援助)	1	1	1	1	1
スタッフ(ピア)	1	1	1	1	1
スタッフ(医師)	1	1	1	1	1

◆構成スタッフ（ボランティア）

運営会議メンバー	13 人
運営スタッフ（メディカル、ピア、対人援助)	10 人
オリエンテーションボランティア	2 人
運営事務局	1 人
各期振り返り・定例運営会議	4 回（7/10 、10/23、1/8、3/2)

(厚生労働省委託：HIV 陽性者等の HIV に関する相談・支援事業)

3-2) 女性交流会

HIV 女性陽性者が日常から解放されて仲間の女性たちとゆったりと時間を過ごす機会として女性交流会を開催して今年で 13 年目となった。今年は、全国から 19 名の女性陽性者（内 3 名は初めての参加）と 7 名の子どもが参加した。年代は、20 代 1 名、30 代 5 名、40 代 7 名、50 代 5 名、60 代 1 名で居住地は、北海道 1 名、北陸 1 名、関東 7 名、東海 1 名、関西 8 名、中国 1 名で、国籍は日本 15 名、モンゴル 1 名、コンゴ 1 名、中国 1 名、タイ 1 名であった。

1 泊 2 日で実施する本プログラムでは、医療従事者による情報提供や医療従事者への相談ができるほか、今年は参加メンバーによる体操のセッションとアートワークなどレクリエーション的プログラムを実施した。また 13 年目を迎えた女性交流会が HIV 女性陽性者にとってどのような場であったかを振り返り、本会の今後の在り方や、次年度に実現したいプログラム内容などについて討議する時間を設けた。一年に一度、全国の仲間に会う機会としてリピーターの参加者も多いが、これまでの経験から、あったほうがいいと思われるプログラム内容や、新規の HIV 女性陽性者が参加しやすくするためのアイデアを出し合うなど、より質の高いプログラムが実施されるための積極的な意見交換がなされた。

(厚生労働省 HIV 陽性者等の HIV に関する相談・支援事業)

3-3) 薬物依存症からの回復を目指す陽性者のピアグループ「SPICA」

SPICA は、HIV 陽性で薬物依存症を持つ人たちが月 2 回集うグループミーティングである。

2019 年度は、毎月平日に 1 回、日曜日に 1 回合計 23 回ミーティングを開催し、参加者は平日が平均参加者数 2.7 名で述べ 30 名、日曜日が平均 4.9 名で述べ 59 名で、年間の参加者延べ人数合計は、89 名であった。今年度は、平日、日曜日ともに参加者が減少した。昨年度は平日の参加者が 50 名、日曜日が 130 名

であった。人数の減少には参加者のニーズの多様化がある。

依存症は、完全な回復をすることが難しい。一日一日、薬物を使わずに生きることが必要である。

依存症の人達の集う場として月 2 回のミーティングは適切なのかということが問題であるが、昨年度までは月 2 回仲間とのつながりを確認しながら薬物を使わない生き方を続けている人たちが集う場として SPICA が機能していた。今年度は、複数の参加者が再使用したことにより SPICA のプログラムを抜本的に検討し直した。依存症からの回復をし続けている人たちは、従来の月 2 回のグループミーティングへの参加を継続することとし、回復が途中で中断された人については、グループミーティングへの参加はせずに個別面談をして治療につなげた。これまで連携を持ってきた精神医療機関とより綿密な連携を行い、毎日ミーティングを行っている当事者グループの DARC とも連携することで依存に戻る人たちが個々に必要としているニードに合った支援につなげることとなった。スタッフ体制も当事者 3 名と支援者 1 名から支援者 2 名と増員した。SPICA の役割を抜本的に検討し直した経験を通して、SPICA は固定のグループではなく、医療機関、薬物回復グループなどとの連携の中で、地域で安定して回復をしている人たちが回復の途上を確認する場であることを再確認した。参加者にとって今何が必要なのかを察知し、適切な移行を適切な時期にすることが必要であることが明確になった。

（厚生労働省 HIV 陽性者等の HIV に関する相談・支援事業）

3-4) HIV 陽性者交流会

CHARM では HIV 陽性者が他の陽性者と共に助け合う活動を行なっている。

仲間という意味でピア活動と呼んでいる。仲間が仲間を支える難しさも多く経験する一方、仲間にしかできない支援もある。その地道な取り組みとは少し距離があるところでここ数年 PrEP や U=U などの国際的キャンペーンの日本版が色々なところで言われるようになり、何となく陽性者はどこかに置いてけぼりになっているような感じがし、今回みんなはどう感じているのだろうかということを一緒に話してみようと、2019 年 10 月 20 日 11:00-15:00 に開催した。

プログラムには、ピア活動を各地で行なっている HIV 陽性者 16 名、医療者 7 名、行政職員 3 名、高齢者施設職員 1 名、支援者 5 名の総勢 32 名が参加した。中にはこれからピアグループを作ろうと考えている人たちも参加していた。

集会では、各地からの発題として「ピアサポートを始めて現在までのこと」を PARTNERS の山本克也さんが、「地域でピアサポートを続けているわけ」を Rin かごしまのユタカさん・ミキオさん、「薬害被害から始まったピアサポート何周も回って考えたこと」をりょうちゃんずの早坂典生さんが発題した。

ピアサポートがどんどん生まれることを期待していたが、そのようにはならなかった。現在は限られた人たちが仲間の支援を続けている。医療は進んだが HIV への偏見、スティグマの問題が残っている。その偏見で陽性者が自分自身を裁いている。地域の医療機関を受診する時に病気について言う人、言わない人は別れる。拒否される経験は

傷つく経験でもあり当事者が表に立つことは厳しい活動である。陽性者は自分の重荷を降ろしていないことを医療者は知ってほしいと長谷川博史さんは話した。薬害エイズ活動のリーダーであった石田よしあきさんが言われた「病者が病者で居られる社会」を創っていくために一人一人が何をするかが問われている。

解決せずに残っているスティグマの問題とどう向き合っていくのかは当事者にとって、支援者にとって、医療者にとって、教育者にとって課題である。

(厚生労働省委託：HIV 陽性者等の HIV に関する相談・支援事業)

4) 多言語支援

4-1) HIV と結核の通訳派遣事業

2019 年度の医療通訳派遣件数は 286 件で、2018 年度の 219 件よりも 67 件増で 1.3 倍となった。しかし、新型コロナウィルスの流行の影響で、2 月以降の依頼が減ったのではないかと思われる。その内 HIV 診療及び検査時の通訳派遣は 216 件であった(2018 年度は 151 件)。結核通訳派遣は 65 件(2018 年度は 68 件)、母子保健通訳派遣は 5 件であった。

HIV 診療時の通訳派遣は大阪医療センター及び兵庫県立尼崎総合医療センターへの英語、ネパール語の派遣回数が多かった。昨年度多かったフィリピン語の依頼は減り、代わってネパール語とベトナム語の依頼が増えた。新しく感染を知り、更生医療や引っ越しの手続き、妊娠の検診などのために同じ患者に複数回派遣することが派遣数の増加につながったと考えられる。スペイン語、ポルトガル語は長年つきあいのある患者からの再依頼があった。拠点病院から新規患者のための通訳依頼が重なった。

その他は京都市下京区役所での HIV 検査の英語通訳を 93 件派遣した(2018 年度 66 件)。京都市 HIV 夜間検査に外国語(英語)通訳派遣ができることを知られてきたことで、通訳派遣サービスを希望する利用者が増えたと考えられる。旅行者、日本と他国を行ったり来たりしている者、留学生などが、友人やパートナーと一緒に頻繁に受けに来ている。またコミュニティーセンターdista でのゲイ・バイセクシュアル向けの HIV 検査への英語、中国語通訳の派遣依頼を受け、検査 12 件、結果返し 4 件の合計 16 件を派遣した。派遣している英語、中国語以外のニーズがあることもわかった。

2019 年度　HIV 関連の通訳派遣実績(件数)

	派遣先	英語	中国語	フィリピン語	ネパール語	ベトナム語	フランス語	スペイン語	タイ語	ポルトガル語
HIV 診療、行政手続き等	大阪医療センター	16		1	11		1		8	
	大阪市立総合医療センター	2			3					
	堺市立総合医療センター		4			6				
	滋賀県立医大付属病院									3
	関西医大付属枚方病院	2						2		
	兵庫県立尼崎総合医療センター	14			8					
	その他の医療機関	2			3	2		1		2
	行政機関同行	5	1		4			1	1	
	その他(自宅、CHARM 事務所)						2			

HIV 検査	京都市下京区役所	93								
	dista キャンペーン検査	10	6							
	大阪市 HIV イベント検査		1		1					
	HIV 関連派遣合計	144	12	1	30	8	3	4	9	5

(合計 216 件)

結核通訳では、従来の大阪府、大阪市、堺市、八尾市、枚方市、京都市の他、大阪府の寝屋川市が中核市になったことで、通訳派遣委託契約を締結した。2019 年度の結核通訳派遣は昨年度とほぼ同じ 65 件であった。大阪府からの依頼が昨年度より減ったが、大阪市からの依頼が増えた。言語別でみてみると、ベトナム語が 29 件で最も多く、英語 10 件、中国語 7 件、ネパール語 6 件その他の言語は数件ずつの派遣であった。

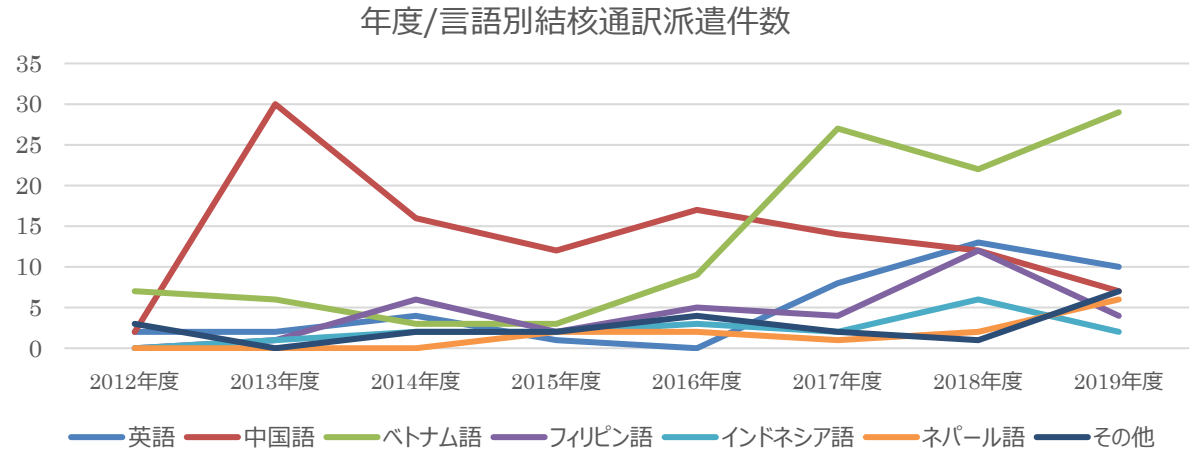
2019 年度結核通訳派遣実績(件数)

依頼先	派遣先	英語	中国語	フィリピン語	ネパール語	ベトナム語	フランス語	スペイン語	タイ語	ポルトガル語	インドネシア語	ヒンディー語
大阪市	城東区保健福祉センター					1						
	福島区保健福祉センター			1								
	東淀川区保健福祉センター	1										
	西淀川区保健福祉センター					1	1	2				
	淀川区保健福祉センター		1	1	1							
	西成区保健福祉センター		1									
	西成区保健福祉センター分館					1						
	西区保健福祉センター					1						
	中央区保健福祉センター					1						
	北区保健福祉センター	1										
	港区保健福祉センター			1								
	東成区保健福祉センター	1										
	生野区保健福祉センター	3	1			4						
	阿倍野区保健福祉センター				1	1						
	浪速区役所					1						
	生野区役所					1						1
	平野区役所					1						
	都島区役所										1	
	大阪市立十三市民病院		1		4	1		1				
	近畿中央呼吸器センター				6							
	大阪府結核予防会大阪病院		1									
	大阪出入国在留管理局					1						1
	その他の医療機関			1		1						
	日本語学校					1						
	患者自宅、職場等	2				1						

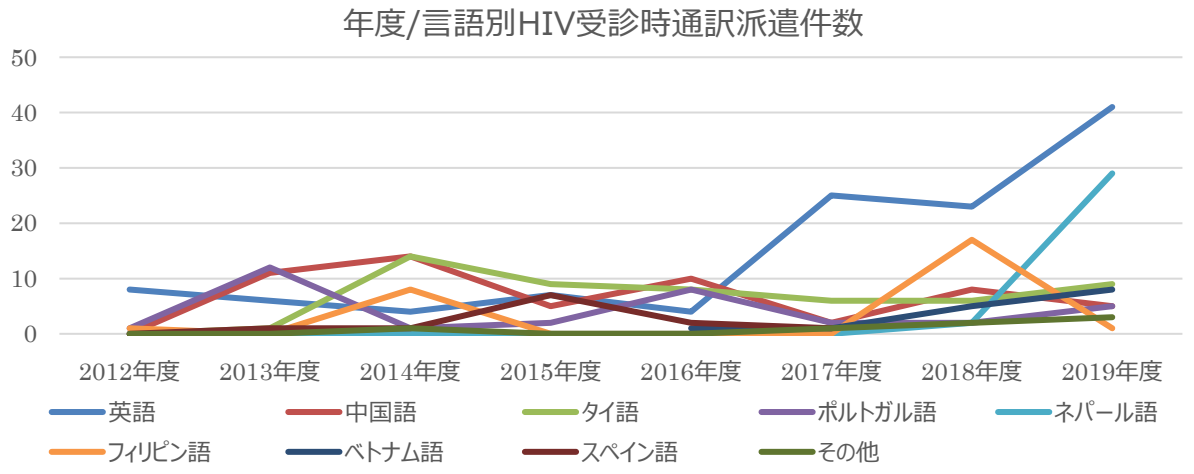
大阪府	池田市保健所	1										
	大阪市立十三市民病院	1										
	研修センター		1								1	
堺市	近畿中央呼吸器センター		1			1		1	1			
八尾市	大阪はびきの医療センター					1						
	職場					2						
枚方市	枚方市保健所		1									
寝屋川市	大阪府結核予防会大阪病院											1
滋賀県	市立長浜病院					1						
	結核関連派遣合計	10	7	4	6	29	1	3	1	1	2	1

(合計　65 件)

年度別/言語別結核通訳派遣数のグラフを見ると結核の通訳派遣での必要言語は年度によって差があることがわかる。2019 年度の英語通訳を派遣した 10 件の対象者はすべてアジア出身者であった。



2019 年度は英語とネパール語の依頼が他の言語と比べ格段に多かった。ネパール語の増加は、日本に入国したネパール人の増加を反映している。2019 年度の英語の通訳を利用したのはアフリカやアジア各国の出身であった。



(HIV 診察・同行通訳派遣事業：厚生労働省委託事業、結核通訳派遣事業：大阪府、大阪市、堺市、八尾市、枚方市、寝屋川市、京都市委託事業)

4-2) コミュニティー健康相談会

医療にアクセスしにくい外国籍住民が自分の健康状態を知り、医療者に相談する機会を提供することを目的とした健康相談会を 1 月 26 日 13:00-16:00 にカトリック大阪大司教区本部事務所で実施した。

今年度は、カトリック大阪市教区が支援している難民の人たちに参加してもらうことを目標に早い時期から宣伝にも力を入れた。また教会のミサに参加している人にも 2 週続けて案内を行なった。

カトリック大阪大司教区社会活動センター・シナピス、サウスイーストアジアコミュニティー、精華地域活動協議会、中央区役所保健福祉課子育て支援室、CHARM の共済事業であったため、各団体からスタッフが参加し、当日は医療従事者が 4 名、通訳が 7 名、母子保健専門相談員が 2 名、その他に受付と全体のコーディネートを担うスタッフが 4 名という人数が対応した。

カトリック玉造教会のミサに参加した人がミサの前後に立ち寄り、28 名が健康相談会に参加した。体重体組成計、血圧計、ストレスチェッカーを使って、日頃の健康に対する不安や疑問に対応した。医療者との相談を受けて 2 名が受診と検査を勧められた。今年度の相談会が目指した難民の参加はなく、終了後の聞き取りから、健康相談会でできるのは、相談だけでその後の診療が保証されるわけではないので参加のメリットを感じないということが参加がなかったことの理由であることが分かり、さらなる工夫の必要が明らかになった。

4-3) 外国人母子保健事業

2019 年度は堺市保健所の依頼でベトナム人親子交流会へ通訳派遣を行った。担当者からは大成功で終えることができたとの感想が寄せられた。

助成金の申請を行ったが、受けることができず一般的な母子保健事業への通訳派遣は行うことができなかった。今後は少し方向修正を行いたいと考えている。

活動を通じて連絡を取り合ってきた医療機関から希少言語についての相談が入った。今年度は、地域で連携している医療機関からの依頼で希少言語であるネパール語の派遣を行った。

依頼元	派遣先	ベトナム語	ネパール語
堺市保健所	堺市南保健センター	1	
CHARM 自主事業	いわいレディースクリニック		4

(合計 5 件)

5) 調査研究

HIV 陽性者の地方コミュニティーでの受け入れに関する研究　分担研究者　武田丈

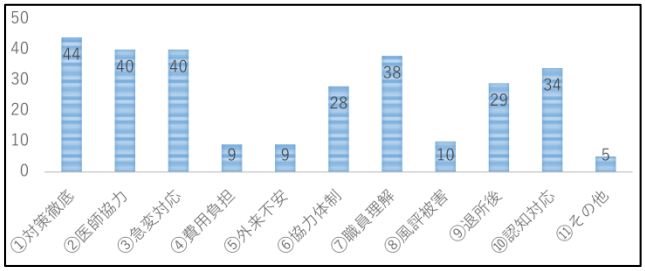
HIV が長期療養の疾患となり、HIV 陽性者の大半は、1-3 カ月に一度医療機関で体調を確認して薬の処方を受けながら生活をしている。基礎疾患を抱える人は複数の治療をしながら生活している。HIV は、その治療をエイズ拠点病院が行ってきたことから、地域連携体制が充分確立していない。また地域での支援体制は、国が制定している高齢者福祉や障がい者福祉制度以外には市民団体による支援も試行錯誤の段階である。その現状を捉え

て今後の方向性に向けた提言を行うことが当研究の目的である。研究 2 年目の 2019 年度は、地域のインタビュー等を行い実態と課題を明らかにした。

HIV 治療の専門である拠点病院と地域の医療機関の連携を知るために拠点病院の依頼を受けて患者を地域で診ている診療所の医師 6 名にインタビューを行った。2 人は、拠点病院で診療を経験した専門医から開業医となり、在宅で HIV 陽性者を診る体制を作っている医師、2 人は、開業医から始めて HIV と出会って専門病院との連携しながら地域で診ている医師、2 人は歯科医師である。多くの医師が HIV に関心を持ってそれぞれのやり方で診療をしている姿に触れ、心強く感じた。エイズ拠点病院は現在診療と研修で手一杯であると思われるが、地域の医療機関のバックアップ機能を果たすことも大事な役割であると感じる。

高齢者施設での HIV 陽性者の受け入れはなかなか進まない。大阪府、大阪市の協力を得てそれぞれが行った施設職員向け研修終了後にアンケートを実施し、84 件の回答を分析した。その結果、受け入れに当たっての課題として多かった回答は、「感染対策（標準的予防策）の徹底」であった。感染力が弱く体液でしか感染しない HIV は、処置の際に手袋を使用するだけで防ぐことができるがそれすら徹底することが難しい介護現場での意識の徹底の難しさや人材不足を表す結果となった。また、管理医師の協力や医療機関の理解、職員の理解と合意など関係者の理解が得られるかが不安であるという答えが続いた。施設内の医療者への情報提供と支援が必要である。

HIV 陽性者の施設受け入れの課題



地域での支援については、CHARM がおこなっている高齢者への民間支援の試みであるそよかぜが、地域の訪問介護事業所と関わりながら公的支援ではカバーされない支援を提供した。公的支援とそれ以外の支援の線引きが難しい中、何を提供していくのかの規約を作成し、医療機関等に説明するためのパンフレットを作成した。

また京都のバザールカフェでは、カフェ運営を通した地域支援のあり方を検証するために歴代の店長等へのインタビューを実施し次年度に向けて継続していく予定である。

(厚生労働研究補助金エイズ対策研究事業「感染症およびその合併症の課題を克服する研究」研究代表者 白阪琢磨)

6) 研修及び受け入れ

6-1) 医療通訳者研修

HIV／結核通訳研修の初心編及び、感染症(結核・HIV)通訳養成講座を各 1 回実施し、新しい医療通訳者の養成、そしてすでに登録している通訳者へのフォローアップを行った。2019 年度に新規登録した通訳者は 8 名だった(英語 5 名、中国語 1 名、ポルトガル語 1 名、ベトナム語 1 名、スペイン語 1 名、ミャンマー語 1 名/複数言語話者あり)。

＜初心編＞

日時　：2019 年 7 月 27 日　13:00-16:30

会場　：エル・おおさか(大阪府立労働センター)

参加者　：23 名

参加者の使用言語：英語、中国語、タイ語、スペイン語、ベトナム語、フィリピン語、ポルトガル語、マレー語、ミャンマー語。

内容　：HIV 医療の実際。結核医療、検査、保健指導の実施について。

(厚生労働省委託：HIV 陽性者等の HIV に関する相談・支援事業)

＜実践編＞

日時　：2020 年 2 月 8 日　10:00-16:50、2 月 9 日　10:00-16:30

会場　：エル・おおさか(大阪府立労働センター)

参加者　：1 日目　16 名(7 言語)、2 日目　18 名(9 言語)

参加者の使用言語：

1 日目　英語、中国語、スペイン語、ベトナム語、ヒンディー語、ウルドゥー語、スワヒリ語。

2 日目　英語、中国語、ポルトガル語、インドネシア語、タイ語、ベトナム語、ヒンディー語、ウルドゥー語、スワヒリ語。

内容　：1 日目　医療通訳に必要な結核・エイズの基礎知識、通訳技法、当事者の話を聴く

2 日目　医療通訳の職業倫理、医療通訳者のセルフケア

感染症通訳のための実技演習(中国語、フィリピン語、ベトナム語)

(その他の言語通訳者は見学)

外国人医療及び HIV 医療に長年取り組んでおられる港町診療所所長の沢田貴志氏の提案で、昨年度関東で実施した感染症通訳者研修会を関西でも開催することとなった。研修会の実現には、杏林大学北島勉氏が研究事業としてご尽力下さり、関西だけでは開催できない内容を含んだ研修会となった。

CHARM からの案内やのウェブサイト、Facebook、Twitter 等で開催を知ったという参加者は長時間の講座であるにもかかわらず熱心に耳を傾けていた。研修会は、丸 2 日間で非常に内容の濃いものであった。1 日目は、感染症の基本を学んだ後、外国人結核患者当事者の経験を聞く時間を持った。当事者の意見を聞くことは、参加者のみならず講師の役を担った医療者にもよい機会となったようだ。2 日目のロールプレイは杏林大学宮首弘子氏の主導で、通訳者のやる気を引き出す手法がとられた。医療通訳者のセルフケアでは実際に体を動かす等して通訳者同士交流を深めることができた。東京と大阪で医療通訳研修を長年行ってきた団体、メンバーがお互いの情報交換をする機会にもなった。

事後アンケートではどの講義も好評であった。参加者の希望、ニードを知ることができたので次回の研修で応えていきたい。

(2019 年度厚生労働科学研究費補助金エイズ対策政策事業「HIV 検査と医療サービスへのアクセス向上に資する多言語対応モデルの構築に関する研究」班　研究代表者：北島勉による委託事業)

医療通訳研究会(MEDINT)・CHARM 母子保健登録者フォローアップ研修 2019
日時　：2020 年 1 月 12 日　13:30-16:30
会場　：西宮市大学交流センター
参加者　：70 名
参加者の使用言語等　：通訳者(英語、中国語、スペイン語、ベトナム語、ポルトガル語等)、医療者
内容　：「就学前の子供たちの言語発達を考える～言語聴覚士の立場から」

2017 年に医療通訳医研究会との共催で母子保健通訳者養成研修のフォローアップを 2 年ぶりに開催することができた。言語通訳者だけではなく、手話通訳者、医療者などが参加した。シンポジストである手話通訳士・言語聴覚士上田月美氏、アメリカ言語聴覚士協会認定スピーチランゲージパソロジスト・言語聴覚士鈴木美佐子氏、ファシリテーターである桃山学院教育大学講師オチャンテ村井ロサメルセデス氏のどの発言も興味深く、質疑応答も非常に活発に行われた。医療通訳と教育通訳を兼業している参加者も多く、活躍の場がより多い教育通訳へ寄せる大きな期待を感じる場となった。アメリカではパソロジスト教育の一環に通訳者に伝えておかなければ治療に差しさわりが出てくる項目が含まれているというのが大変興味深いと感じられた。

(MEDINT・CHARM 共催事業)

6-2) 実習生・研修受け入れ

日　時	主催機関・対象者	実施内容	参加者数	担当者
2019 年 4 月 ～2020 年 3 月	関西学院大学人間福祉学部 桃井雛子	外国人の健康支援 特に難民の精神の健康について CHARM とシナピスでの実習	1 名	青木理恵子他 スタッフ全員
9 月 12 日	大阪大学医学部実地研修	施設見学と講義 日本に暮らす外国人の状況と CHARM の陽性者支援	6 名	青木理恵子 陽性者 2 名
10 月 21 日	大阪医療センター HIV 感染症医師、看護師研修	施設見学と講義 日本に暮らす外国人の状況と CHARM の陽性者支援	医師 1 名	青木理恵子

7) 広報

日本で生活する外国人が HIV 及び医療受診に必要な情報を得るために理解できる言語で書かれた情報が必要である。CHARM ではホームページ上で 8 言語(英語、中国語、韓国朝鮮語、フィリピン語、タイ語、スペイン語、ポルトガル語、日本語)で情報を提供してきた。近年の HIV 事情の変化に伴い内容の変更を行った。来日することを予定している外国人の間で医療保険制度について理解が十分でないことが明らかになったため、日本の健康保険制度について説明するページを新設した。また HIV 陽性者が日本で HIV 診療を受けるために必要な条件や準備する必要がある書類、手続きの手順などを掲載した。

新しいコンテンツは、これまでの 8 言語に加えてネパール語とインドネシア語に翻訳し、全部で 10 言語の体制となった。翻訳は今年度中終了できたのは一部であるため、来年度も継続して行う。ホームページの改定の他に、Facebook、Twitter の SNS を利用し、多言語での情報発信を行った。ホームページのアクセス数、SNS の投稿数、インプレッション数は下記の通りである。

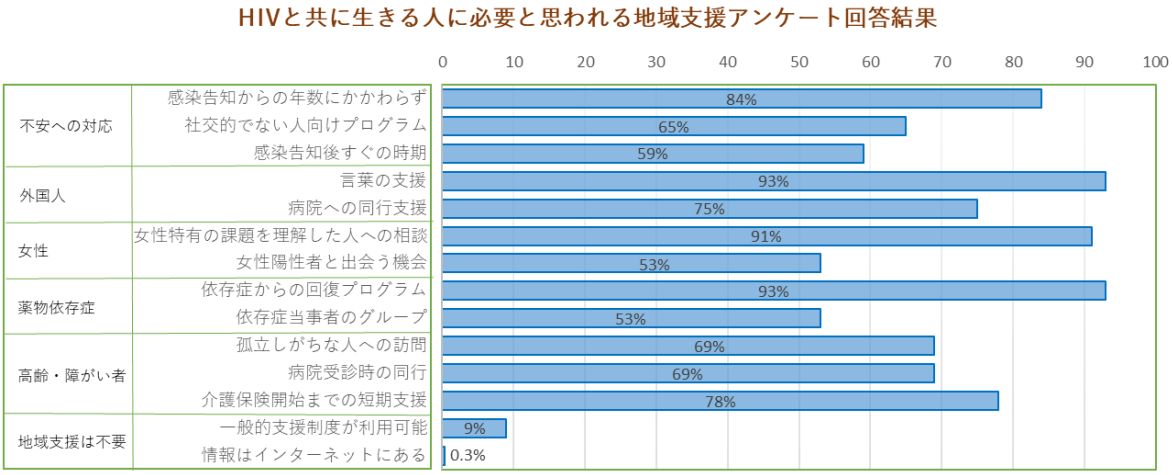
ホームページ等による情報発信及びアクセス数

内容 / 月	閲覧数	訪問者	Twitter 投稿数/インプレッション回数 i)	FB 投稿数	HP 投稿数
2019/4	7,920	4,964	55 / 28,158	1	2
2019/5	8,219	5,331	61 / 42,886	5	2
2019/6	10,921	8,124	24 / 19,819	1	0
2019/7	10,805	8,516	30 / 17,873	6	4
2019/8	14,576	10,328	40 / 22,903	1	1
2019/9	12,884	9,083	34 / 20,094	2	1
2019/10	9,347	5,907	36 / 19,626	2	1
2019/11	13,188	9,093	28 / 14,807	2	2
2019/12	15,102	10,033	27 / 19,946	5	4
2020/1	9,863	7,390	5 / 11,325	2	1
2020/2	11,324	8,299	1 / 3,153	8	1
2020/3	9,567	6,912	24 / 15,437	6	3
2019 年度平均	11,170 (10,677)ii)	7,847 (6,922)ii)	30 / 19,669	3	2

注 i) インプレッションとはユーザーが Twitter でツイートを見た回数

ii) 2018 年度の平均

8) 理事会
理事長　松浦基夫
副理事長　武田丈
理事　中萩エルザ、白野倫徳、福村和美、川名奈央子、エレーラ・ルルデス・ロザリオ
2019 年度理事会は、3 回会議を開催して協議検討を行なった。
2019 年 5 月 11 日 15:00-17:00 参加　理事 5 名、欠席 1 名、事務局 1 名
　・新理事の選任と決議
　・2019 年度の事業計画
2019 年 7 月 5 日　13:00-15:00 参加　理事 6 名、欠席 1 名、事務局 1 名
　・CHARM のミッションステイトメント(使命)の文章化の協議
2019 年 10 月 26 日 15:00-17:00　理事 6 名、事務局 1 名
　・CHARM のミッションステイトメント(使命)の文章化の協議(2)
「多様性のある社会を創り出すために当事者、専門家、市民、自治体が協働する。」
ミッションの要素内訳
＜協働＞
・支援から協働へ
・各自がそれぞれの立場で主体となり創り出す
・人が生かされる機会づくり
・人が癒される場の創造
＜創り出す＞
・協働で生み出す
・新たな事業の生み出し、新たなシステムの構築
・他団体等との連携と広がり
＜多様性＞
・個別で詳細なニードへの対応
・違いを豊かに感じる出会い、楽しみ、祝う機会
　理事会では、CHARM が行っている事業を客観的に見ることを目的に関西圏、中国、四国のエイズ拠点病院の医療従事者に地域支援に期待することを問い合わせるアンケートを実施した。アンケートは、21 医療機関、59 人に発送し、32 通の返信があった(回収率 54%)。回答者 32 名の内、13 名は医師、9 名は看護師、6 名はソーシャルワーカー、2 名は薬剤師、2 名がカウンセラーであった。
　HIV 陽性者に対して必要と感じる地域での支援について、要望が多かったのは外国人の言葉の支援(93%)と薬物依存症の依存からの回復プログラム(93%)であった。女性特有の課題を理解した人による相談(91%)、感染からの年数に限らず不安を抱えている人に対する支援(84%)、についても必要と感じている医療者は多かった。CHARM が行なっている支援の多くは必要であると医療従事者は感じていることが分かったが、同時にその内容も多様化していることも明らかである。



アンケートの自由記述欄では、新たな必要性も提起された。

・外国人症例について検討会を持ちたい

・脳症を患う患者の家族支援に対しての支援。

・薬物依存症の患者の専門機関との連携が欲しい。

・外国人、精神疾患、依存症などの複合的障がいがある人の同行支援

・外国人向けパンフレットで初診、日常生活、服薬、など場面ごとに説明された資料が必要。
必要な言語が次々変わる。現在はベトナム語が必要。

・高齢者は社会的支援が多いが若者に少ない。服薬中断も増加している。社会的に孤立者、
若者向けのプログラムが必要。

アンケートから得られた意見をプログラムに反映させることができるように検討をしていきたい。

9) 会員総会

日時：2019 年 6 月 8 日（土）15:00-17:00

場所：在日大韓キリスト教大阪北部教会

出席：会員 39 名（本人出席 17 名、委任出席 21 名）会員以外 17 名　総計 56 名

　2019 年度の会員総会では、川名奈央子さんとエレーラ・ルルデス・ロザリオさんを新規理事となる提案があり、満場一致で承認された。川奈さんは 10 年以上様々な活動に参加しているが理事としては初めての参加である。エレーラさんは、CHARM を設立した時期の初代理事として役割を担い、その後職員として主に子育てをする外国人母子支援に携わった。地方で働いていたため数年ぶりの復帰である。一方、理事の横田恵子さんと監事の岸本昌利さんの退任が承認された。

　総会議事の後にパネルディスカッション「外国人母子支援の必要性と可能性」に関して保健師、子育てをした外国人の経験を聞き、海外にルーツを持つ人が日本で出産し、子育てをすることについての経験を聞き、どのような支援があったら良いのかについて意見交換を行った。

10) 事務局

青木理恵子　　(事務局長、総務、SPICA、エイズ専門相談、そよかぜ)

庵原典子　　(通訳派遣事業)

プラーポンキワラシン(外国語によるエイズ電話相談事業、コミュニティ健康相談会、広報)

前田圭子　　(ひよっこクラブ、女性交流会)

松原光与　　(会計、会員管理)

11) 会員

会員数　98 名 (前年比　＋2 名)

〈内訳〉

賛助 A　22 名

賛助 B　17 名

正会員　43 名

法人　　16 口

12) 寄付者一覧(敬称略)

◯寄付　個人

今井 由三代(北陸 HIV センター)、岩本 美和子、植田 恵美、榎本 和子、織田 幸子、上内 鏡子、川江 友二、来住 和美、白野 倫徳、岳中 美江、竹村 浩子、田守 敏樹、永富 美加、中萩 エルザ、成田 康子、新倉 久乃、丹羽 芳雄、福嶋 眞一、宮田 りりぃ、森山 裕季、山口 和子、龍宮 遣一、リンパヤラヤ スプラニー、多文化キャンプ参加者、事務所に設置の募金箱、匿名

◯寄付　団体

日本基督教団 池田五月山教会

日本基督教団 京都上賀茂教会

日本基督教団 大正めぐみ教会

CHARM!